

## フィールドワーク便り

### 思いの交錯する場

— タマン語識字教室に通う女性たちと日常生活をともにして —

安 念 真衣子 \*

「次はマイコの番ね、この文字読める？」

「ka, kha…」一斉に笑いがどっと起きる。少しずれた拙い発音に対してか、あるいは外国人と一緒にタマン語を学んでいる状況に対してか。

ここでは、調査地であるキュイ村で出会ったタマン語識字教室に通う女性たちについて紹介したい。

#### キュイ村へ

キュイ村は、ネパールの首都カトマンズから東へ 50 km 程の所に位置する。村の近くには、中国国境へと続く幹線道路が通っており、バスで 3、4 時間で首都に出られる都市

近郊の農村地域である（写真 1）。

ここを初めて訪れたのは、2011 年 1 月、識字教室の調査が目的であった。カトマンズからバスを乗り継ぎ、幹線道路から歩くこと 1 時間。外国人が来ることはあまりないらしく、視線を一斉に浴び、仕草から言動まで観察されているようであった。

公用語であるネパール語を学び、村を訪れた私にとって、耳に入るのは聞き慣れない言葉だ。どうやら私に関する情報は、タマン語で交換されているらしい。どこから来たのか、何しに来たのか。恥ずかしがりの村の人たちは、私の調査協力者であるミナにタマン語で聞き、私も交えて会話するときはネパール語に切り替えているのだ。

タマン語はチベット・ビルマ語族の言語で、話者数は 100 万人超とされる。ネパールでは 5 番目に多く人口の 5% 強を占める。この地域ではタマン語が共通語のように使われるとはいえ、大抵の人はネパール語も話す。多言語状況にあるネパールでは、人々は 2 言語以上を操るのである。村内でも、タマン語で会話されているかと思えば、相手によってはネパール語で、さらにテレビをつけ

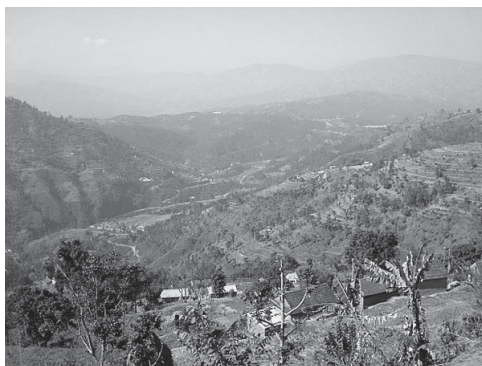


写真 1 段々状に広がる村の風景

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

るとヒンディー語のドラマが流れるといった具合である。

一方、読み書きではデバナガリ文字のネパール語が最も一般的であり、チベット文字表記のタマン語も時にみられる。識字教室で習得の対象となっているのは、デバナガリ文字のタマン語である。

### 女性の仕事

キュイ村では、私はいつもミナと行動をとりにした。土地勘をつけるためと「ミナの友だち」と覚えてもらうためである。そのため、女性たちと一緒に仕事をしながら、話をするようになった。

ミナをはじめ村の女性たちのパイタリティは底知れない。早朝、鶏の鳴き声と競るようにして起床したかと思えば、牛の乳搾り、餌の草刈りなど朝から忙しい。日が昇る前に一仕事してしまうのだ。

日中は、畑作業やコド（シコクビエ）打ちなどその日の作業を行なう（写真2）。収穫したコドの穂を家の前に広げ、日光に当てて乾燥させる。それを身長よりも長い棒で打っていく。凸凹の地面に対して平行に棒を振り下ろさなければ、コドの実は殻から剥き出せない。背筋を使って体を反らせ、一気に腰を屈めて振り下ろす。まさに、腕、腰、背中、足を使う全身運動である。私も微力ながらやらせてもらったが、普段パソコンや本に向かうことの多い私にとって、10分もすれば十分に筋肉痛ものである。そのうえ、打った途端に乾燥したコドの実の殻が空気中に舞い上がり、全身にふりそそぐ。「かゆくなる



写真2 コドの脱穀作業

からもうやめなさい」と言われて交代し、隣で行なっている莫莖作りを手伝った（写真3）。

縦方向にプラスチックの紐を固く張り、それに藁を編み込んでいく。適度に水をかけて藁が折れないように湿らせ、それを右左から交互に縦紐に編み込んでいくのだ。ギッチリと固く張っているだけに、半分ほど編み上げると、中指と薬指に豆が出来る。背中と首筋に太陽の光を浴びながら、そして「カン、カン」と鳴るコドの実打ちの音を聞きながら、黙々と編み続け、夕方には1枚の莫莖が完成した。「売り物になるから、明日ももう1枚編んでね」との言葉に良い気になったものの、疲れ果てた私を待ち受けるのが、夜の識字教室であった。

### 識字教室の場

夕食を終え辺りが暗くなった頃、LEDライトを片手に教室へと向かう。

もともと住居だった建物は、現在は1階が家畜小屋、2階が教室兼物置として利用されている。

軋む階段を上ると、所狭しとトウモロコシ



写真 3 莫菴作り

の皮が散乱し、部屋の奥には収穫したトウモロコシが積まれている。米とともに主要な穀物であるトウモロコシは雨季に収穫し、乾燥させて保管する。そして年間を通して、人、牛、山羊、鶏が、挽いた粉を食し、皮は家畜の敷物に、芯は薪として使用される。

土壁にはホワイトボードが掛けられ、ポスター紙が貼られる。1つ、時間集まること。2つ、19時15分に始めること。3つ、お酒を飲んで来ないこと、もち込まないこと云々、記された教室のルールはなかなか興味深い。

女性 10 人程が車座になると部屋はいっぱいだ。膝と膝を押し合いながら、座る所を確保する。

まずは雑談。この外国人は誰かといういつもの話題に加え、その日の出来事や、村の青年による駆け落ちの話へと展開していく。ひとしきり話のはずむと、お決まりの復唱が始まる。学校でしばしばみられる、先生の後に続いて、教科書を音読する学習法である。

クマリ（28 歳女性）は、恥ずかしがり屋だ。外国人で見知らぬ私がいるからだろうか。「言わないなら、歌を歌いなさいよ」と

周りの女性たちに煽られながら、先生とやりとりする。

クマリの横では、アサ（30 歳女性）が、重そうな瞼でこっくりしつゝ眠気に抗っている。早朝起床し、牛や山羊の搾乳、餌用の草刈り、牛糞を家の壁や土間に塗る掃除、トマトの収穫や豆撒きの畑仕事、薪割りと食事の用意…と数々の仕事をこなした彼女たちの 1 日の最後にあるのが識字教室に行くことなのだ。教室で淡々と繰り返される復唱の様子や教科書の内容、そして 1 日の仕事を見ていると、この地で生きる彼女たちの生活にそれがどのように役立つものなのだろうか、疲れた彼女たちはどのような思いで教室へ足を運んでいるのだろうか、とふと思うのである（写真 4）。

### アサの語り

「誘われたからただ来ているだけよ。」

アサは識字教室の話聞いて回る私に対してそう語った。しかし、何度か会ううちに彼女から聞いた話は異なるものであった。

「旦那は、教育を受けた奥さんがいいと言って、もうひとり奥さんを作りカトマンズにいろ。悔しくて、識字教室に来ているわ。」

滞在中に次第にわかってきたことであったが、ここでは 2 人の配偶者をもつことは特異なことではないようだ。アサの他にも、教室に来ている女性の中には、同様の体験をしている人がいる。

「1 人目は仕事のための担い手と結婚、2 人目は自分の好きな人と結婚する。だから 2



写真 4 車座になる学習者たち

人目は大切にされるんだけど、1人目は大変なのよ。隣の家のアサ、上の家の人、あの家の人も。私は2人目だけだね。」

#### ミナの経験

調査協力者であるミナも同様の経験と無関係ではない。ミナは、NGOのスタッフとの個人的な繋がりをもっていて、識字教室の開催にも寄与した人物である。

ミナは幼い時に母親を亡くしている。彼女の母親は、父親の2人目の妻であった。後妻であるミナの母親が亡くなると、父親は前妻のところに行ったきりになってしまい、彼女は兄、2人の姉とともにキュイ村での生活が続けた。農作業、家事等を行ないつつ彼女は学校に通った。学校をやめる話もしたが、「勉強は続けなさい」と兄に叱られ、兄夫婦と姉が経済的な支援をすることで、大学にも通った。早朝に村から2時間かけて通うこともあったし、忙しい時には、街にいる父親の家に滞在した。しかし、そこには、前妻方の親戚、子どもたちが20人近く生活しており、一切の家事がミナに回ってきたのだ。

「村にいても街にいても、仕事は多い。でもどうせ仕事をするなら、昔から住んでいてよく気の知れた人が多い村の方が好きなのよ。それに、兄夫婦には助けてもらったから。村の仕事はたくさんあるし、少しでも義姉の助けをしたいの。」

彼女は村での生活を好み、可能な限りキュイ村から通い、この春彼女は大学を卒業した。

#### 識字教室の女性たち

教室に集まる女性たちには、当然のことながら、それぞれさまざまな経験や個人的な事情がある。

NGOとの繋がりをもち、識字教室の開催に尽力したミナや、夫が語る「教育を受けた女性」への羨望をもつアサ。「実は学校も少し行っただけだね」と言いながらも教室に通い、「ka, kha…」と文字の復唱を行なう女性。あるいは、識字教室に対して、ネパール語の習得を目指す学校教育の場ではみられない「タマン語の扱われ方」、すなわち、「(私たちの)タマン語も、ネパール語と同等で、学習するに値する言語だ」という喜びを表現する女性。一方で、ネパール社会で生活するうえでタマン語学習はどれほど重要なのかと疑問視する声。

そんなさまざまな思い、期待、楽しみ、不安を交錯させながら、女性たちは日々教室へと向かうのだ。

後日、ミナはNGOへ就職が決まり、カト

マンズへ生活拠点を移すことになった。

村での彼女の働きぶりは目を見張るものがあり、彼女のそんな姿勢が認められたともいえる。あるいは、調査協力者として「外国人と良い関係をもった」ことが、NGO にとって評価のひとつになったのかもしれない。村の人からすれば、「カトマンズに住み、オフィスで働き、現金収入が得られる」ようになるミナは「大きな出世をした」と見做されるだろう。

日本で連絡を受けた私は、嬉しさとともに

素直に喜べないところもあった。「教えてもらい、学ばせてもらう。」そんな、あくまで「村の人から学ぶ」という姿勢でいた一介のフィールドワーカーが、いつしか、影響を受けるだけでなく、良くも悪くもその人々の生活に絡み付いている、という現実を知ることになったのだ。

「フィールドにいる」こと。そこからすでに、村の人とのインタラクションは始まっている。

---

## 「首ふり病」と暮らす人びと

—ウガンダ北部における「奇病」の蔓延—

川 口 博 子\*

2011 年 11 月ごろ、ウガンダ共和国のアチョリ・ランドで「奇病」騒ぎが始まった。インターネット上のいくつかのニュースサイトに取り上げられ、ウガンダ国内でも新聞やラジオ、テレビ番組は、連日関連ニュースやトーク番組でもちきりとなった。この奇病は、「首ふり病 (nodding disease)」と呼ばれており、発症の初期に患者は、食べ物を目の前に置かれると首を「こくこく」と縦に振り始めることに由来する。症状が進行すると昏倒、痙攣、麻痺などが起こり、成長が阻害され、言語障害を起こすこともある。発狂して走り

出し行方不明になることや、発作のために意識を失ったまま死亡することもあるという。

地元新聞である *Daily Monitor* によればウガンダ北部のキトゥグム県、ラムオ県、パデー県を中心に約 3,000 人の事例が報告されており、すでに 200 人が死亡している。20 歳未満の子どもへの感染が全体の 90% 以上である。原因は、ウガンダ政府やアメリカの CDC (Centers for Disease Control and Prevention) など外国の機関も含めて調査に入っているが未だに不明である。流行地域が川の近くであることから、河川盲目症を引き

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科





写真1 私の調査地であるアチョリ・ランドの中心地



写真2 ANAKA 国内避難民キャンプ（2008 年）

起こすオンコセルカに関係があるという説や、紛争中に使われた兵器によって毒性のある物質がばらまかれたなどの説があるが、証明されていない。原因も感染経路もわからない、まさに「奇病」である。地域のヘルスセンターでは、発作を抑えるために癲癇の薬を処方しているが、在庫が不足し、すべての患者に必要な量はいきわたらない。

こうしてウガンダ国内から国際社会にまで知られるようになった首ふり病は、突如降ってわいたような恐ろしい「奇病」として扱われた。ところが実際には、1997年にはすでに報告されており、2000年代には地域住民に広く知られた病気であった。首ふり病がこの地域を蝕み始めたころ、人びとは紛争によって国内避難民キャンプでの生活を余儀なくされていた。北部ウガンダでは、現大統領であるヨウェリ・ムセベニが政権をとった1986年前後から前政権の軍人たちがこの地域に流れ込み、神の抵抗軍（Lord's Resistance Army）などの反政府組織と政府軍とが20年以上にわたって武力紛争をつづ



写真3 PABO の元国内避難民キャンプ地  
人びとが村に帰った後も商店や定期市で賑わう。

けた。この地域が国際社会やウガンダの主要地域から切り捨てられていたころ、人びとはキャンプのなかで首ふり病が広まっていくのを目の当たりにしてきたのである。

私自身は、この「奇病」騒ぎをとおして、今回はじめて首ふり病の存在を知ることになった。乾いた風が砂埃をまきあげ、遠くの原野には野火が放たれて空に向かって黒い煙が三筋、四筋と立ちのぼる2012年1月の終わり、私は首ふり病をこの目で見るための旅に出ることに決めた。この時期のアチョリ・ランドは、乾季のまっただなかにある。

アチョリの人びとは乾季を *oro* と呼ぶ。Oro とは「取り除く」、つまり大地にしみ込んだ水が干上がって空に帰るということである。アチョリ出身で世界的に著名な詩人オコット・ピテックは、著作「ラウィノの歌」のなかで、*oro* は平和とダンス、そして狩りの季節だとうたっている。そんな「平和」の季節に、「奇病」騒ぎはウガンダのメディアをとおしてさらに過熱していた。

首ふり病の報告数が一番多いパデー県は、私が調査しているグル県からアチュワ川を隔てたすぐ向こう側にある。川を渡ると、道はなだらかなカーブを描く登り坂になり、竹の群生地が現れる。ここに暮らす人びとは小屋の壁を竹で組み、竹を編んで戸を作る。また、竹は人びとにとって重要な現金収入源でもある。このアンガグラ郡の中心となる市場があるデン村周辺は数年前まで国内避難民キャンプであった。さらに十数キロ進んだところでは、道路沿いにいつもたくさんの物売りのおばさんたちが、シアバター油やハチミツ、カボチャ、ラッカセイ、果物、それから手焼きの壺などを並べている。このラチェコチョットはウガンダ最北の街であるキトゥグムとグルの中間地点として賑わう。ここにも以前はこの地域最大の国内避難民キャンプがあった。私は、今回の旅ではラチェコチョットに宿をとり、アンガグラ郡で聞き取りを始めた。

たくさんの患者がいることに本当に驚いた。はじめは一軒一軒をまわって聞き取りをおこなったが、翌日には、私のことを知った親たちが罹患した子どもたちを連れてやって

きた。私は、朝腰を下ろしてから夕方まで立ち上がる間もなかった。症状はさまざまで、一見すると健康にみえる子どももいた。しかし、ぐったりとうなだれた状態で母親に抱きかかえられ、自分では歩くことも話すこともできない子どもや、頻繁に昏倒するために体中が傷だらけだったり、ひどい火傷を負ったりしている子どももいた。また、おとなの患者も少数ながらいるのだった。デン村から歩いて1時間半ほどのところにあるアルーフォールズ小学校では、2011年の年度はじめには196人の生徒がいたが、1年のうちに首ふり病が原因で46人が退学した。さらに、アンガグラ郡のヘルスセンターには、440人の患者が登録されているという。

人びとの話によれば、首ふり病の患者がいる家族に対する地域社会の反応は冷たいものだった。飛沫感染や接触感染を恐れて、おとなたちは自分の子どもたちが首ふり病の子どもと遊ぶのをいやり、患者がいる家には立ち入らないようにもする。ヘルスセンターの職員は、家庭内でも、食事のときには患者とそのほかの家族の皿を分け、患者は別の寝床で寝るように指導している。家族や親族でさえも、患者のまわりには近づきたがらないという。しかしながら近年では、あまりに多くの世帯が患者を抱えることになったため、地域社会のなかでの偏見は同情に変わってきたという。たとえば、5人の子どものうち3人が首ふり病患者であるAさんによれば、子どもたちが首ふり病を発症し始めたころから夫が病気を恐れて家に寄りつかなくなり、別の女のところに転がり込んだ。しかし、のち

にはその女とのあいだにできた子どもも首ふり病を発症した。Aさんの親族は病気を恐れてはいるが、畑仕事などに呼んでくれて報酬をくれたりもするという。私は患者のいる世帯からしか聞き取りをしなかったが、同行してくれた案内人は「みんなが病人の力になりたいとは思うけど、自分や家族が大切だ。だからといって…」と、人びとが共有している葛藤と取り除くことのできない不安へのある種のあきらめをにじませていた。

人びとはこの病気に、どのように対処しているのだろうか。私に話をしてくれたすべての世帯が、ヘルスセンターから薬の配給をうけていた。ただし、薬の配給は十分ではなく、数週間からそれ以上、薬がないということもよくある。同時に、約半数の世帯がハーバリストの処方による薬草などを試しており、その大半は自ら買い求めたものではなく、ハーバリストを名乗るものが、個別に家を訪ねて売りにきたものであった。あるいは、2011年には *ajwaka*（霊媒師）が現れ、20人以上の患者を地域のはずれにある岩山に連れて行き、紛争によって死んだ人の悪霊を祓う儀礼を1週間にわたっておこなうために、親たちに現金とヤギを要求したこともあった。もっとも、参加した子どもの言によれば、*ajwaka* は最初の日だけは歌い踊ったが、その後はヤギを食べ、残ったヤギを近隣の人びとに売ってもうけたという。また2004年には、猟師がチンパンジーの脳の一部と称するものをもってきて、首ふり病に効くと売り歩いた。このほかにも、もともとアチョリにはなかった治療法が創り出された

り、どこから伝わったりして、国内避難民キャンプのなかで広まり試されていた。

人びとは、首ふり病の元凶は紛争のときに死亡した人の死霊であると語ることがよくある。原因のわからない「奇病」の落ち着きどころとして、一番腑に落ちるのが紛争による死霊ということなのだろう。けれども、人びとが本当に死霊を原因だと信じているかどうかはうたがわしい。どうすることもできない病に直面して、気持ちを整理するために死霊をもち出しているにすぎないとも思う。実際に死霊に対するお祓いをしようという人にも、したことがある人にも出会わなかった。それは、首ふり病そのものが、10年以上も日常の一部をしめているという、解決することもできなければ無視することもできない現実の表れではないだろうか。人びとは、人知を超えたものを恐れるとともに、この病気をそこに「在るもの」として受け入れようとしていると思われる。少なくとも「奇病」騒ぎはそこにはない。

このように首ふり病が日常化するまで、どうしてウガンダ政府は何の手立ても講じてこ



写真4 元気に遊ぶ子どもたち



なかったのだろうか。どうして私たちは誰も「気づかなかった」のだろうか。私は、この人びとの苦境を救うために立ち上がろうとヒューマニズムを掲げるような人間ではない。しかしながら地域研究をするものとして、知ろうとすること、あるいは発信することに対する責任は感じずにはいられない。最初に聞き取りをした患者の父親は私にこう尋ねた。

「それでお前は何かしてくれるのか。このまま立ち去るだけなのか。」

やはり、ただ立ち去るわけにはいかないだ

ろう。一日の聞き取りが終わって案内人の自宅に戻ると、彼の妻がご飯を用意してくれたことがあった。私と調査助手は顔を見合わせから、石鹸でいつも以上にごしごし手を洗い、おずおずと皿に手をのぼした。私も感染が怖かったのである。フィールドワーカーとして、私はどこまで人びとに関わることができるのだろうか。私に一体何ができるのかー乾季まっただなかの日差しのもとで、私ははっきりとした答えを見つけれないままにアチョリ・ランドをあとにした。

---

## ハウサの人びとの勤勉さ

—ニジェールの現地調査の経験から—

桐 越 仁 美\*

ニジェール共和国ー西アフリカに位置するこの国は、国土の4分の3がサハラ砂漠に覆われた、いわゆる「砂の国」だ。しかし、すべてが砂というわけではない。南部は少ないながらも雨が降るサバンナで、トウジンビエ畑が広がる世界である。日本では普通に地面を覆っている黒い土壌は、ニジェールのサバンナには存在しない。中学生の頃から、日本では想像できない世界に憧れを抱き続け、私は2010年8月3日によく赤茶色のニジェールの大地を踏みしめた。

首都から南東に4時間、サバンナの中をまっすぐに伸びる幹線道路を車で走り抜けると、ドッソ州の都市ドゴンドゥチにたどり着く。「ドゴンドゥチ（＝高い岩）」という地名のとおり、首都のニアメとは異なり、この周囲にはインゼルベルグが悠然とそびえ立っている。ドゴンドゥチからさらに南東に7kmほどのところに位置する農耕民ハウサのダンダグン村は、いつでも村びとの笑い声が響き渡る、私の大好きな村だ。

私はダンダグン村で合計4ヵ月間の調査の

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

日々を過ごした。予備調査を終え、2011年8月に3度目の調査で村を訪れた際には、村の男性に手伝ってもらい、村の周りに生育する樹木を調査した。私はこの調査によって、ハウサの人びとのもつ樹形の認識と利用について知ることになり、それをテーマに研究を進めることになった。協力者のひとは樹木のハウサ語の名称とGPSで計測した緯度と経度、ひとは樹木の高さとは一番下の枝までの高さ、ひとは胸高直径を私に伝えてくれる（写真1）。私は枝の本数を数え、みんなが伝えてくれる情報をノートに記載していった。

1日に200本の樹木を目標にして調査をこなしていく。この目標は思ったほど簡単なものではなかった。調査期間は8～9月で、雨季にあたる。雨季の気温は乾季に比べれば低いものの、日中の最高気温は40℃を超え、太陽光と砂による反射、湿度も合わせれば、体感温度は50℃に達するのではないかという暑さになる。暑いニジェールの調査地で、週休一日制という日程で樹木調査を続け



写真1 調査風景

樹木調査では胸高直径、樹高、GPSの担当を決めて作業を進めていく。

るのは、体力的にも、精神的にも大変な作業であった。大学時代に自転車部で鍛えた体力と根気だけが自慢の私も、「もう調査はつらい！帰りたい！」と言って弱音をこぼすこともしばしばであった。それでもハウサの友人たちは、「ヒトミの調査のためなら」と、つらい調査に文句も言わずに付き合ってくれる。アフリカの中でも厳しい環境の中で生きる農耕民ハウサは、力強く、勤勉な人びとである。

しかし、私が彼らを勤勉だと素直に評価できるようになるまでには、いくばくかの時間が必要であった。ハウサという人たちは、良くも悪くもパワフルなのだ。とにかくおしゃべりが大好きで、毎日毎日、名前も知らないような人も含めて、数十人もの人びとが私の家を訪ねてくる。あいさつだけならいいが、葉をくれ、そのペンをくれ、服をくれ、自分の焼いた肉を買えという頼みごとがともなうことも少なくはなかった。一歩でも家の外に出れば、子どもたちは写真を撮ってもらおうと、「ヒトミ！フォト！」と言いながら、押し合いへしあいの大混乱になる。私の村の生活には、落ち着く暇も、場所もない。でも、私が彼らの要求を軽く受け流しても、彼らは怒ることはなかった。その様子は子どもから大人まで、ただただ自分という存在を私に記憶させようとしているようであった。しかし、今から考えると、私に自分たちのことを記憶させることも、彼らにとっては重要な要素となる。人脈づくりやおしゃべりによる情報収集は、ハウサの重視する人生の手掛かりであるビダ (*bida*) へとつながる。ダンダグ

ン村では毎晩いたるところから、楽しそうなおしゃべりの声が聞こえてくる。

そして、作物を少しでも多く生産しようとする彼らの熱意には目を見張るものがある。畑へのゴミの投入も、そのうちのひとつであり、畑に投入するゴミは家庭で出る食べ物の残りや家畜の糞に加えて、鍋や布、使い古したサンダルなども含まれる [大山 2007]。毎日、女性は薪の採集やバンバラ畑の農作業のついでに、ヤギやヒツジなどの小家畜を放牧する (写真 2)。子どもたちは畑での草を刈り集めて家畜に与える。家畜は殖え、その分、家畜の糞が屋敷地にたまる。家畜の糞や食べ物の残りをかき集めたゴミを、家族で協力して畑に少しずつ運んでいく。ゴミを置いたところには、砂が溜まり、シロアリが集まってきて、ゴミが分解され、いい土壌ができあがる。そこに生えたトウジンビエはゴミの栄養分を吸収し、とても立派な穂をつけるようになる。

ゴミの投入以外にもいろいろな工夫がみられる。樹木にまつわる工夫を知ったのは、樹木調査の最中だった。樹木を対象に調査をし

ようと決めたからには、この辺りの樹木の特徴を理解しなくてはならないと、ダンダゲン村周辺に生育している樹木をかたっぱしから調べることにした。仲のいい 17 歳の男の子 2 人 (ジブリーナ、ラハマン) と 30 代の男性 2 人 (フセイン、ユスフ) に協力を依頼してローテーションを組み、毎日のように樹木調査に励んだ。男の子 2 人は「銃みたいだ!」とはしゃぎながら、樹高棒を担いで、調査場所の畑まで案内してくれた (写真 3)。最初は、「一体、ヒトミは何をしているんだ?」と、みたこともない道具を使って調査をする私たちを訝しげにみていた村びとたちも、一週間程度で私の仕事を理解し、「うちの畑にはいつ来るんだ?」などと誘ってくれるようになった。どうやら自分の畑に生育している樹木をみてほしいようだ。なぜ村びとは自分の畑の樹木をみてほしいなどというのだろうか。

ある日、畑の中に細くヒヨロっとした小さな樹木をみつけた。通常であれば枝葉を茂らせる低木の樹木が、下の方の枝が剪定されてヒヨロヒヨロの状態になっている。その



写真 2 女性は畑仕事にヒツジを連れて来て、畑の周辺で放牧をする



写真 3 樹木調査に協力してくれたジブリーナ (左)、フセイン (中央)、ラハマン (右)

姿は、正直いってかなり頼りない。「この木は、枝が伐ってあるの？」と私がフセインに投げかけた質問をきっかけにして、私はハウサのもつ樹形の認識を知ることになった。ハウサの人びとは樹形をラブ (rabu)、バラウ (barau)、マタシ (matashi)、マヤンチ (mayanchi) の4種類に分類しているが、私がみつけたのはマタシと呼ばれる樹形であった。その近くには、伐られた枝葉が積み重ねられている。

フセインが口を開いた。「この畑はちゃんと手入れされているから、マタシがいっぱいあるんだ。ほら、あそこにもあるだろう？こうやって下の枝を切ると、木は上へ上へと伸びるんだ。それにサバクバッタの住処にもなくなる。枝葉は畑の栄養になるし、マタシは風からトウジンビエと砂を守ってくれるんだ。」よくみると、たしかにこの畑ではどの樹木も剪定されている。そして、枝葉は地力の落ちたところにきちんと積み重ねられている。剪定された樹木の本数はかなりのもので、多い畑では数百本にものぼった。ハウサは、自分の畑の中のすべての樹木の位置とその枝葉の状態を把握したうえで、それらすべてを管理の対象としている。村びとが自分の畑の樹木調査をしてほしいというのは、自分の畑での仕事ぶりと樹木の管理状態をみてほしいということなのだ。

最近では化学肥料の購入と利用がみられるようになり、お金持ちの畑では化学肥料の力でトウジンビエが高さ3m程度にまで生長している。しかし、その隣の化学肥料を確保できない村びとの畑に生育するトウジンビエ

は、悲しいほどに小さかった。こういう畑では、マタシを作り、枝葉を地力の落ちた場所に置き、ゴミを投入して、どうにかしてトウジンビエの収穫量を上げなければならない。何らかの工夫を施さなければ、トウジンビエは大きく生長することはない。小さなトウジンビエの株間にみえる樹木は、どれもきれいに剪定されている。炎天下、畑の奥の方では、畑の持ち主である男性が小さな樹木を1本ずつ丁寧に剪定している。家にはたくさん子どもたちが待っている。どうにかして、トウジンビエの収穫量を向上させなければならない。

「人も物も停滞してはならない。畑の手入れも出稼ぎも一生懸命にやるんだ。その努力はアラーがみている。いつか絶対に実るんだよ。だから今、ヒトミが頑張っているのもアラーがみている。きっと良い成果が出るよ。」食べ物に困っている彼らを応援したくて調査に来たはずだったのに、逆に彼らの励ましを受けて調査に取り組んできた。彼らの明るくて力強い言葉に背中を押され、1ヵ月で約4,500本の樹木の調査を終えることができた。当初の目標には達しなかったが、ひとまず、充実感にひたることができた。

樹木調査をとおして、私は彼らの樹木の認識とトウジンビエの収穫量を向上させるための熱意を垣間みた。そして、この時ようやく彼らの真の勤勉さと人生に対する姿勢をみたのだ。彼らの行動のすべてを見返し、納得した。ハウサは、草木、家畜、村でのおしゃべり、生ゴミや使い古したサンダルにまで、自



分たちの未来の可能性をかけている。彼らにとって、身の回りのすべてのものが、自分と家族が生きていく未来への貴重な資源となる可能性をもっているのである。

「ヒトミも、ハウサのやり方がちょっと分かってきたみたいだね。」樹形についてのひと通りの説明を終えて、フセインはニカッと笑う。私とフセインが話している間に、太陽は足早にサバンナの地平線に沈もうとしていた。真っ赤な夕日を受けて、17歳の2人が

そそくさと調査道具を片付けて家路につく。村では今夜も、未来への資源となるであろう「おしゃべり」が私たちを待っているのである。

#### 引用文献

大山修一. 2007. 「ニジェール共和国における都市の生ゴミを利用した砂漠化防止対策と人間の安全保障—現地調査にもとづく地域貢献への模索」『アフリカ研究』71: 85-99.

---

## 高速鉄道建設が中国貴州省の農村に与えた影響について

佐藤 若菜\*

筆者は、2009年3月からおよそ2年間、中国西南部に位置する貴州省でフィールドワークを行なった。そのうち約1年間は貴州省東南部の農村に滞在し、中国の少数民族であるミャオ族の刺繍技術について調査を行なった。

調査村での暮らしにも慣れ始めた2010年5月初旬、村ではある噂が流れ始めた。「数ヵ月後に高速鉄道の建設が始まる」というのである。その後、高速鉄道に関する話は、村のいたる所で聞かれるようになった。数ヵ月後、村の水田の一部は埋め立てられ、そこには50名ほどの農民工<sup>1)</sup>が寝泊まりする2階



写真1 鉄道部の事務所と農民工の宿舎

建ての大きな宿舎と鉄道部<sup>2)</sup>の事務所が建ち、大規模な建設工事が始まった。ここでは、噂が流れ始めた2010年5月から筆者が

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 農村部に戸籍をもちながら、主に都市部に移動して働く人々の呼称。

2) 鉄道事業を管轄する行政部門。

滞在した 2011 年 4 月までに、高速鉄道建設をめぐる農村で起こったさまざまな出来事をまとめ、考察する。

噂が流れ始めた当初、村人の話の争点は土地の売却についてだった。高速鉄道建設にあたっては、一部の土地を国が購入、もしくは借用するだろうといわれており、これまで土地を売却したことがなかった村民は果たしていくらで売れるのか、誰の土地が売れるのかといった話を頻繁にしていた。なかには土地を売りたいくないという人もいたが、多くの村人が現金獲得の機会を得ることに期待を寄せる口ぶりだった。

実際に大きな動きがみられたのは 2010 年 11 月末、高速鉄道建設予定地にある 240 の無縁墓を掘り起こし、別の場所へ移動する作業が始まってからである。この作業は村人（主に男性）によって行なわれ、ひとつの墓につき 200 元<sup>3)</sup> の報酬が鉄道部から支払われた。報酬は作業に参加した人で均等に分けられた。その後、親族ごとに墓を掘り起こし、移動した。親族が管理する墓には、ひとつの墓につき 800 元が支払われ、この補償金は親族内で均等に分けられた。墓を掘り起こしてみると、金のイヤリングや翡翠の腕輪がみつかることもあり、喜ぶ村人もいた。

墓を掘り起こし移動することに関して、反対する者はいなかった。しかし、12 月初旬、補償金をめぐって不満の声が出始めた。村で唯一コンピューターを所持している男性がインターネットで調べたところ、国が定める



写真 2 墓を掘り起こす村人たち

額はひとつの墓につき、無縁墓なら 800 元、管理する親族がいる場合は 3,000 元と書いてあったと述べたことがきっかけとなった。加えて、工事にあたっては村を流れる小川の砂を使用していたが、本来であれば 1 畝（15 分の 1 ヘクタール）あたり 3,000 元が支払われるといった内容が書いてあったというのである。

この話が村に広まってから数日も経たないうちに、村の男性 40 名程が集まって、村に建てられた鉄道部の事務所に抗議に出向いた。それを聞きつけた郷長や郷の派出所の所長はすぐに駆けつけ、数日後に説明会を開くことを約束し、その場をひとまず収めた。

会議は 3 日後の夜に、村のバスケットボール場で行なわれた。各世帯から男性 1 人を代表として選ぶこととされており、123 世帯のうち出稼ぎに出ていない約 60 名の男性が参加した。筆者は女性であるため参加することができなかったが、会議では村長が鉄道部に代わって説明をしたという。小川の砂の

3) 調査当時、1 元は約 12.6 円。

使用にあたっては鉄道部が 1 年に 1 万 5,000 元を支払うこと、それは村の全ての世帯で均等に分配することが説明された。墓については述べられなかったという。

この会議を境に大きく変わったことがある。村人による疑いや妬みの矛先が、鉄道部から村長に向けられるようになったのである。村人が指摘しなければ村長は黙って砂代を着服しようとしていたのではないかと指摘する者が出てきた。加えて、村長は 1 万 5,000 元以上の砂代を得ているのではないかといった憶測も呼んだ。さらに、妬みの矛先は高速鉄道建設に直接関連しない事柄にまで及んでいく。「村長は毎月 1,000 元も給料をもらっているらしい」とか、「村長は政府から（毎年）給付される種芋を親類に横流ししている」といった噂も聞かれるようになった。加えて、「隣村の村長も鉄道部から支払われた砂代の 9 割を着服していたため村人から非難され、その結果、木につるされた」といった噂も流れたことによって、これ以上利益の分配に不平等があれば、暴力も厭わないという声も日に日に高まっていた。

会議から 6 日たっても砂に対する補償金は支払われず、このことに腹を立てた 40 名程の男性が今度はより大きな事務所がある隣村に抗議に出向いた。そこで鉄道部は、3 日後に 1 万 5,000 元を渡すことを約束したという。期日までに村の男たちはその補償金を得たのだが、この砂代を受け取った頃から、これまでまとまっていたようにみえた村人の態度が徐々に変化していった。砂代の分配は 2 度の抗議に参加した男性によって決めら

れ、その内容は、会議に出席した 60 名程に各々 10 元、鉄道部に抗議に行った者には 1 回につき 1 人 50 元支払うことになった。残額の約 1 万元は、旧正月に行なう運動会の賞金としたり、牛を買って皆で食べることにした。

ここからわかるのは、砂に支払われる補償金はそもそも村人全員で均等に分配すると村長が説明したにも拘らず、実際には抗議に参加した男性によって決められ、その 3 分の 1 を彼ら自身が手に入れる結果となっていることである。彼らの言い分としては、「抗議に参加しなかった男たち（約 20 名）は会議のときにも発言しておらず、村長から賄賂を受けとっているかもしれない」、「抗議に行くのは疲れるから、報酬をもらうべきだ」というのである。一方、抗議に行かなかった男性たちは賛同することも、反論することもなかった。

12 月 20 日頃、土地の買収が始まると、村では「多くの補償金を得たのは誰か」といったことを頻繁に話し、比べるようになった。一番多い世帯は約 10 万元を得たが、全く得られなかった世帯もあった。これにより、土地の所有をめぐる村人同士の言い争いが起こるようになった。怒りの矛先は、鉄道部でも村長でもなく、村人へと移行したのである。

12 月末になると、旧正月のために出稼ぎ先から帰省する 10 代から 40 代の男女が増え始めた。相変わらず村人同士の争いはあったが、徐々に収束しつつあるようにみえた。しかし、ここで言い争いは終わらなかった。特に、数万元以上を得た世帯において、土地の補償金の分配をめぐる争いが始まったので



写真3 土地売却の合意書にサインをする村人たち

ある。ここでは、父母とその息子にどのように分配するかが争点であった。普段出稼ぎに出ている男性も帰省したことにより、争いはより複雑になっていった。

約9万元を得たある世帯は、50代の父母と20代から30代の息子が3人いた。次男と三男は村外で働いており、普段は長男とその妻、その子ども2人が、父母と同居していた。補償金の分配は文字が読める母親が父親に代わって行なうこととし、長男と次男には各々2万元、三男には2万5,000元、父母の老後の資金として1万7,000元、残りの約8,000元は売店の開店資金にすると決めた。母親は、普段から面倒見のよい三男が老後の世話をしてくれると当てにしており、三男へは5,000元多くあげるだけでなく、現金で渡そうと決めていた。一方、長男と次男には現金ではなく、母親名義の定期預金とし、孫が高校に進学するまで引き落とせないようにすることにした。母親は、「もし私の老後の面倒をみて、死んだときにはちゃんと葬式をあげてくれるなら、お金を渡す」と長男と次男に告げた。それに対して、同居している

長男とその嫁が母親に対して怒りをあらわにし、喧嘩が絶えない日々が始まった。その後、母親は三男が住む他県で1年の半分以上を過ごしている。

2010年5月からの約1年間を高速鉄道建設とともに振り返ると、疑いや妬みの矛先が鉄道部という外部者から徐々に、村長、他の村人、そして家族へと、より身近な人に移行したことがわかる。最初は墓の移動に対する報酬や補償金をめぐって鉄道部に対する不信感が芽生え、その後砂代をめぐっては村長が疑われた。土地売却の際は村民同士が争い、その争いがある程度収まると、次は世帯内でその分配をめぐって言い争いが起きた。

そして、着目すべきもうひとつの点は、この怒りや妬みのなかには、高速鉄道建設が始まる以前から潜在していた問題も組み込まれているということである。たとえば、村長やその妻、親類が利益を多く得ていることや、そうした村長の行動を黙認する村民がいること、世帯内で父母から一部の息子が最優先されているといったことである。高速鉄道建設をきっかけに新たな利益が生まれ、その獲得をめぐってさまざまなレベルで争いが起きたが、同時に建設以前からあった問題も浮き彫りになったのである。

2011年3月になると、農民工が倍以上に増え、井戸水や木の実をめぐって争いが起きたり、農民工による鶏の盗難事件が起きたり、農民工と村の既婚女性が交際したりと、新たな問題が起こるようになった。

高速鉄道の建設により、中国農村部には現金、そして農民工といった他省出身者が大量



に流入した。また、一部の村民は現金と引き換えに土地を手放したが、今後どのように生計を立てていくのか、定かではない。確かなのは、高速鉄道建設は中国農村部にこれまで

とは異なる大きな影響を与えているということである。これによって、中国農村社会はどのように変化していくのか、今後も注目していきたい。

## アカの正月をともに過ごして

佐野航平\*

私はラオス北部、中国と国境を接する山間盆地に暮らすアカの人たちの農村に住み込み、現地調査を行なっています。彼らはラオスだけでなく、中国雲南省南部やタイ北部、ミャンマー、ベトナムに広がる山間地に居住しています。彼らの新年は西暦でいうと12月です。そんな彼らの正月をのぞいてみましょう。

朝はトントンと音が聞こえます。餅を搗く音です。踏み臼を使って皆で搗くと2分もすればもう餅になります(写真1)。昔はもつとあったという踏み臼も、今では村に10基もありません。踏み臼の主要用途である米の粳すりや精米を機械で行なうようになったからです。各世帯で交代して踏み臼を使い、餅を搗きます。

出来た餅はエゴマの粉をまぶし丸く形を整えます。エゴマは餅が手に付くのを防ぐ役割とともに、文化的価値も含んでいるようで

す。彼らが言うには「餅はタイ系の人たちも搗くが、エゴマを使うのはアカだけであり、エゴマがなくなればアカでなくなる」とのこと。彼らの焼畑にはエゴマが多く植えられていますが、その理由のひとつが年中行事ごとに食べる餅にまぶすために必須であるからです。餅は丸く形を整えた後、干します。干して硬くなった餅は焚火で焦げないように気をつけて焼き、日本と同様に餅が軽く膨らんだところで食べます。エゴマの風味が香ばし



写真1 踏み臼を用いた餅搗き

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

く、老若男女皆食べます。また砂糖をまぶして食べる人もいます。

もち米は丸太をくりぬいて作った蒸し器で蒸します。普段はうるち米を同じ蒸し器で蒸して食べています。うるち米を炊くのではなく蒸して食べるのは珍しいと思い、理由を尋ねてみました。「炊いたお米は、炊きたては美味しいが冷めると硬くなり不味くなる。蒸したお米は冷めても程良い硬さのままで美味しく食べられるし、持ち運びにも便利だから」という答えが返ってきました。米にもまだまだ私の知らない食べ方があるのだと実感しました。

餅搗き以外にも正月の準備として肉料理の調理が進行しています（写真2）。今年は牛1頭と、水牛2頭を皆で手分けして購入し、屠殺しました。暴れないように足を紐で縛り、首の動脈を鉗で切ります。牛の鳴き声と最後の抵抗の様子が見慣れていない私には衝撃でしたが、村の人たちは皆笑顔です。その後は慣れた手つきで皮を剥ぎ、肉塊に切り分けていきます。骨付き肉や内臓はスープに、他の肉はミンチにして食べます。生のミンチ



写真2 牛肉の調理

肉に血液を混ぜた料理もあり、私は食べるのが不安でしたがショウガなどのスパイスによる味付けで食べやすく美味しい料理に仕上がりました。肉は最大の御馳走で頭部や皮など食べることが出来る部分は全て利用します。

餅も肉料理もお酒も準備が整うと各戸で宴会です。近隣の村から親戚やお客さんが招待され、皆で酒を飲み語ります。また広場で音楽の演奏と踊りが始まると、皆広場に集まります。調査村はラオスの主要民族であるラオと同様にラオス語やタイ語の歌を流し、女性と男性でペアになって踊ります。宴会は夜まで続きました。客が帰る時には餅やお菓子などのお土産を渡します。

アカの人たちの正月には日本人には想像できない面白い点があります。村によって三が日の日程が違うのです。つまり今日はこの村が正月で宴会があり、明日はまた別の村が正月で宴会があるということです。正月だけでなくブランコ祭りなどその他の年中行事の日程も村の長老によって決められるため、村によって日程が違うのです。日本では西暦や旧暦の正月が、ラオスではラオ暦の正月が同時に皆で祝われますが、アカについては全体で共有する正月がないようです。その理由は、村ごとの独立性なのではないかと考えています。おかげで調査地域の他村の正月にもいくつか参加することが出来ました。村によって違いがあるようで、別の村ではアカ語の歌を流し、アカの伝統衣装をまとった少年少女が踊りを披露していました（写真3）。

調査村の人たちにどうして伝統衣装を着ないのかと尋ねたところ、「皆が着ていないか



写真 3 他村でみたアカの伝統衣装を着て踊る少年少女たち

らだ、お前も着たいのなら貸すぞ」と答えられました。皆がTシャツにズボン、女性は市場で売られているラオの伝統衣装であるシンと呼ばれる巻きスカートを着ている中で、アカの伝統衣装を着るのは恥ずかしいかもしれません。年配の方は「昔は自分たちで育てた綿を紡いで、織り、染色し、裁縫した服を皆着ていた。しかし時間がかかり、疲れる。今は市場で服が手に入るから楽だ。しかし結婚式の時は伝統衣装を着るし、亡くなった人に着せる服は必ず伝統衣装だからこれからも作り続けるよ」とおっしゃる方もいましたが、着る機会がこれからも減っていくことは予想できます。

伝統の変化として他にも住居の変化が挙げられます。アカの伝統的な住居は高床の居住空間と、土間がひとつの茅葺屋根の下にある半高床式の家屋でした。しかし調査村に唯一あったこの伝統的な形式の家屋は、私の滞在中に解体されてしまい今は残っていません。現在は茅葺であっても、土間のない高床式の家屋になり、また多くの世帯がラオのように

高床式でトタンやタイル屋根の家屋に建て替えています。さらにお金に余裕がある世帯はコンクリートで新居を建てています。現在住んでいる茅葺の家屋をラオのタイル屋根の家屋に建て替えたいという人に茅葺の家屋も美しいと思うと言ったところ「親戚や友人を招く時に恥ずかしいからやっぱり嫌だ」と言われました。このような思いがある限り、ラオの高床式でタイル屋根の家屋、そしてコンクリート製家屋への変化は止まらないでしょう。

このような変化の原因はさまざまです。調査村では 2006 年から中国向け輸出用サトウキビの栽培を開始しました。サトウキビ栽培導入以前の、焼畑と家畜飼育や狩猟採集を中心に行っていた暮らしと比べると現金収入は格段に増えました。2009 年には 100 年以上住んでいた山頂部から現在の村がある盆地の低地部に移住しました。バイクがなかった頃は山頂部から片道 4 時間かけて町の市場に歩いて行っていましたが、現在はバイクに乗ればたった 15 分で市場に行くことが出来ます。2010 年に簡易水道が、2011 年には電気が通ったことでさらに便利になり「山頂から平地に移住して良かった」と多くの村人は言います。中国向け輸出用サトウキビ栽培世帯は増え続け、現金収入も多くなり、携帯電話やバイクを購入し、家屋を建て替えることが出来るようになりました。また電気が通ることでテレビを見ることも出来るようになり、ラオスやタイの番組を通して世界中の情報を得るようになりました。このような状況の中では市場で購入した衣服を着、茅葺の家

屋を恥ずかしく思うのも自然な流れかもしれません。

日本も茅葺どころか瓦の家も少なくなり、和服を着ている人も稀です。変化はどの地域にも起きています。よってアカの人たちの変化について私が口を挟むべきではないし、また正しいもしくは間違っているという判断が出来るものでもないと考えます。これからも

アカの人たちは村ごとに日にちが異なる正月を祝い続けるでしょう。祝う気持ちや習慣が残れば見かけにこだわる必要はないとも思います。しかし餅搗きの様子に私が郷愁を覚えたのは事実であり、彼らの伝統的な衣食住が無くなっていくのを悲しいとどうしても思っています。

## 「電話彼氏」を婿にする

### —ウズベキスタンの結婚事情—

宗 野 ふもと\*

ある日、ホームステイ先の住み込みお手伝いの娘ハフィザを訪ねてくる夫婦があった。2人は「ソウチ」で、ハフィザを息子の嫁にと、訪ねてきたらしい。ソウチとは花婿候補側の人間で、花嫁候補の両親に会い結婚を申し込む役目を担っている。今回のように両親である必要は特になくて、親戚や友だちがソウチとなることもある。ウズベキスタンでは、結婚話は恋愛結婚であれ見合い結婚であれ、ソウチが花嫁候補のもとを訪ねて結婚を申し込み、それを花嫁候補の両親が承諾してからでないと具体化しない。その日偶然訪ねてきていた親戚が、ハフィザにソウチが来たことを知ると、なんともいえないニヤニヤした表情を浮かべて、「あらまあ、むふふ、一番い

いことが起きたのね」と私に目配せをしてきた。そもそもその夫婦がなんのためにハフィザを訪ねてきたのか事情を飲み込めていなかった私は、その時は親戚の表情の怪しさも、目配せの意味も、何もわからなかったのだが、

ハフィザは25歳。調査地では20歳前後で多くの娘には結婚話が持ち上がり、遅かれ早かれ嫁いでいく。25歳という十分臺が立った年齢なので、なかなか花婿もみつかりにくい。彼女の父親が「あまり話が通じない」人物だったことと、数年前に母親を亡くしていたために、結婚話がなかなか具体化しなかった事情があるらしい。父親が述べたような人物であるために、親戚でもある住み込み先の主人がハフィザの父親に代

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科





写真1 ホームステイ先の夫婦（左）とソウチ夫婦（右）

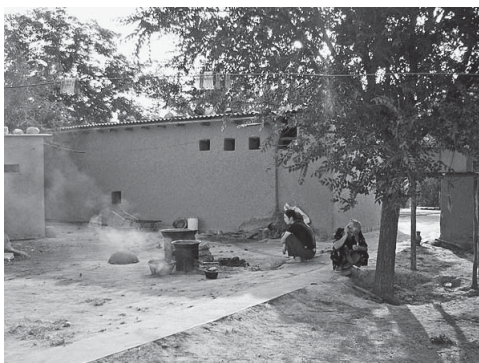


写真2 電話をするハフィザ（右）  
（石村育美氏撮影）

わってソウチの申し入れを受けた。その日、彼女の少し遅めの結婚話の浮上に、終始周囲は喜びで沸いていた。

### 結婚相手は「電話彼氏」

ハフィザには、会ったことのない「電話彼氏」がいることは知っていた。毎晩遅くまで誰かと電話で話していたし、ソウチが来る少し前に、ハフィザから「電話彼氏」と喧嘩をして彼が電話に出てくれなくなったことの相談をうけていたから。今回のソウチはやはり「電話彼氏」の両親だった。ハフィザはケンカなどしながらも、会ったこともない相手と結婚話が出るほどに電話ひとつで愛を育んでいたのだ。しかし驚いたのは、実は今回のソウチは先日ケンカをした「電話彼氏」の両親ではなく、その彼の友だちの両親だったことである。ということは、ハフィザには少なくとも「電話彼氏」が2人いたということになる。2人の「電話彼氏」はお互い友だちなので、今回の一方の「電話彼氏」によるハフィザへのソウチ派遣で、2人の仲は気まず



写真3 ハフィザと「電話彼氏」の初対面の場面

くなっただけだ。そのことをハフィザは少し煩わしげに私に話してくれた。その話を聞いて、私はあっけにとられた。なんて大胆なんだろう、ハフィザ、と。その後、「電話彼氏」たちの仲が修復されたのかどうか、私は知らない。ハフィザが彼らの不仲を私に話してくれたのはこれっきりだったし、そのあと彼女は結婚準備に翻弄されて、きつと疲れてしまったのだろう、しまいには「彼のことが好きかどうかわからない」と漏らすようにな

り、私はなんとなくその後の様子を聞きにくくなってしまったのだ。それでも、ソウチが来てから半年後、彼女は幸せそうに、でも少し不安そうに「遠いけれど、（ガスや電気、水の）環境があるところ」へ無事に嫁いでいった。ハフィザの結婚に関して、私にしてみればいろいろと不思議なことはあったけれど、ここでは、結婚とはそういうものなのかもしれない。

### 「電話彼氏」のみつけ方

ハフィザが「電話彼氏」たちと付き合い出したのは、彼女の友だちがハフィザに彼らの携帯電話の番号を教えたのがきっかけだった。ウズベキスタンでは、近年急速に携帯電話は普及していて、現在では国民の70%が所持しているという説もあるほど。近頃では、ハフィザのように携帯電話を介して結婚相手をみつけたたり、携帯電話は交際から結婚に至るまでの関係維持のためにとても重要なツールとして位置づけられていたりして、出会いを求める若者の心を魅了しているようにみえる。ハフィザだけではなく、ホームステイ先に併設されていた織物工房に働きに来ていた20歳前後の娘たちは携帯電話に皆夢中だった。彼女たちにとって欲しいものは何を差し置いても携帯電話だったし、給料を貯めて念願の携帯電話をもてば、「電話彼氏」を必ずといっていいほどつくっておしゃべりを楽しむのだった。工房で働く娘のノディアは、念願の携帯電話を手にとると、早速織り子仲間のサンタから「電話彼氏」を紹介してもらい、彼とのおしゃべりを日々楽しんでい

た。「どのような人なのか、その男は」と私が尋ねると、「隣り村に住んでいて、とても頭のいい人」と答えた。のろける彼女は、日本でもみたことがあるような女の子の顔で、ほほえましかった。

友だちから電話番号を手に入れるのが、「電話彼氏／彼女」の王道的みつけ方らしい。この他に、若い男性は、定期市（バザール）の携帯電話料金の支払い所で番号を大量に入手して、若い娘が出るまでひたすら電話をかけ続けることもある。若者にかぎらず、ウズベキスタンの人々は自分の携帯電話の番号を見ず知らずの人間に教えることや、自分の番号が勝手に誰かに知られることについてほとんど抵抗がない。むしろ、「なにかあった時のために」といって、多くの人の番号を手に入れてなにかの時のために備えることに余念がない。こうした事情が背景にあって、出会いを求めて電話をかけ続ける若者の手当たり次第的行動も許容されているようだ。料金支払い所には、入金先の携帯電話の番号が記入されたノートがある。番号の入手方法に関して私は知る由もないが、彼らはここから大量に番号を手に入れて、若い娘に当たるまでひたすら電話をかけ続けているらしい。娘が電話に出れば、あとは会話をがんばってその娘と電話の付き合いを続けるのもいいし、娘の友だちを紹介してもらってもいい。芋づる式に出会いは広がっていくのである。

### 娘たちにとっての「電話彼氏」

携帯電話を使って見ず知らずの異性と知り合い、何人もの「電話彼氏」とおしゃべり

を楽しんでいる娘たちだけれど、彼女たちは「娘らしさ」をめぐるさまざまな性規範のもとで日々を生活している。ウズベキスタンでは、婚前交渉はもってのほかだし、結婚前に親族以外の男性と一緒にいるところを誰かに目撃されれば、「あの娘はフラフラしている」という噂がたちまち流れ、その娘の評判はガタ落ち、結婚話は遠のく。「女性は独立しては生きていけない。だから、結婚しなければいけない」という言葉を調査中に何度聞いたことか。結婚適齢期を迎えた娘たちにとって、そして彼女らの両親にとって、婚期を逃してしまうことへの恐れは強い。だから彼女たちがどこの誰かもわからない「電話彼氏」と会うことはハフィザのように結婚話が具体化しない限り、絶対ない。

ハフィザのように「電話彼氏」と結婚にまで至った話は、調査中にちらほら聞いていたものの、一般的ではないし、親がみつめてきた相手との結婚がやはり多い。「電話彼氏」との結婚の望みは薄いけれど、それでも娘たちは彼らとのおしゃべりをやめない。見ず知らずの若い男から電話がかかってくると、適当に嘘をつきながらも、楽しそうに笑っておしゃべりを続ける娘たち。時には隣にいる私を話題に上げて、話をしろと携帯電話を私に突き出してくることもあった。私は何を話せばいいかわからないし、話すこともないので無言で娘に電話を突き返すと、とても不思議そうな顔をして「何で何も話さないの？」と彼女たちは言う。会ったこともない「電話彼氏」とおしゃべりすることに全く抵抗がない彼女たちに、私は苦笑いをするしか



写真4 結婚後ホームステイ先に遊びにきたハフィザ（中央）

なかった。彼女たちが彼らとおしゃべりを続ける理由、それは淡々と過ぎていく村の生活のなかで「電話彼氏」が外の世界への広がりをつなげてくれる数少ない存在だからなのだろう。それから多分、「もしかしたら、もしかしたら、ハフィザのようなこともあるかもしれない、もしかしたら…」と、自分の生活がガラリと変わるかもしれないというドキドキ感をもち続けて、日々を過ごしていたいからなのだろう、と思う。

嫁いでいったハフィザの携帯電話にある日電話をかけてみた。彼女の嫁ぎ先の近くまで行くことがあったから久しぶりに会いたくなったのだ。でも、何度かけても電話は通じなかった。後日ホームステイ先に訪ねてきたハフィザは言った「今は私には携帯電話は必要ない。義理の父の電話があればいいでしょう。だからお義父さんの方に電話してみて、フモト姉さん。絶対に遊びに来て。私たちは、いつでも待っているから」。ハフィザが娘から花嫁に、そして妻になったことを知った瞬間だった。

## 「はざま」で考える

—カメルーン東南部におけるエリエーブの言説をめぐる—

山口 亮 太\*

2011年12月、約1年半ぶりにカメルーン共和国の調査村に入った。コンゴ共和国との国境沿いに住むバクエレ（Bakwele）と呼ばれる民族の調査を再開するためである。私が不在の間に小規模な森林伐採活動が始まり、また私の居候先でありメインのインフォーマントでもあるK夫婦が離婚するなど、今回の調査はさまざまな変化に戸惑うことが多かった。

Gという人物が激やせしていたのもそんな変化のひとつだった。Gは30歳代半ばの男性で、カントン（Canton）という行政区分の長（長は「シェフ・ド・カントン」だが単に「カントン」と呼ばれる）の孫にあたる。初めての調査の時に、彼と一緒に酒を飲みながら、日本の森にはキツネがいてたまに人を化かしたりするなどということを説明したことを覚えている。酒好きだが、飲んでも暴れたり大声になったりしない、物静かな男だった。祖父である現カントンは彼を常に側に置き、彼を後継者だとみる村人も多かった。

Gの姿を見て、明らかに病気であるということには分かった。しかし、半年近くも身体の息さや腹痛といった不調が続いているにも

かかわらず、まだ病院には行っていないというのである。早く病院に行け、と言っているうちに、2012年の元日の夜、彼は亡くなってしまった。最期は国境を渡って、コンゴの呪医の所にいたらしい。私は町に出て調査をしていたため、彼の埋葬にも立ち会うことができなかった。

埋葬のあと、村では盛大に葬儀が行なわれた。なんといっても、彼はカントンのお気に入りの孫だったのだ。遠方からやって来た親族や友人たちをもてなすために、ガソリンを買って発電機を回し、大音量でリングラミュージックを流す。客たちは酒を飲み、歌い踊る。どこかしまりきらない底の抜けたような感じがする。しかし、隣で大笑いして話をしていた女性が、次の瞬間にはカントンの屋敷のサロンに入っていき大泣きを始めたりするのだ。

そのうち、ある噂が聞かれるようになった。Gの死は、カントンの長男で彼の母方オジにあたるT（図1参照）とその息子が引き起こした、というものであった。カントンがとても可愛がっていたGを葬り去ることによって、カントンの後継者としての立場を確実にしようとしたというのだ。さらに、T

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



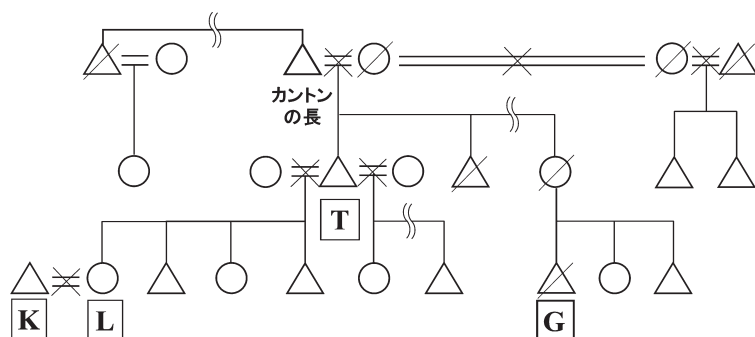


図 1 カントンの長の一族

は過去にも同じ目的で実の弟を亡き者にしたという。彼らはエリエーブ持ち (*mot elieeb*) として有名であり、そのエリエーブ (*elieeb*) で G を殺したということであった。

エリエーブとは、バクエレの人々の間で人間の腹部に存在するといわれる「もの」である。それは持ち主に特定の行動を取るように命令し、持ち主はその命令に逆らうことができない。エリエーブにはさまざまな種類があるが、T 父子が持っていると言われるのが「人を食べるエリエーブ」であった。その持ち主たちはある種の集会を行なうと考えられている。メンバーは、自分の順番が回ってきたら自分の親族などを殺し、集会で共食する。そうしないと自分自身が他のメンバーに食べられてしまう。T とその息子は、G を集会のメンバーに捧げて食べたのだと疑われていた。G の妹によれば、G の埋葬前夜にカントンの屋敷のサロンで眠っていた T が突然、「お前たちはたらふく食べただろう。これは俺の妹の息子だ。満足しただろう？」と寝言を言っただけらしい。ますます怪しい。これをうけて、G の妹は呪医に犯人を確認してもらったと

述べた。一方で、G の親族以外は「家族が G を病院に連れて行かずに放置したから死んでしまったんだ」とささやきあっていた。つまり、G の死にはエリエーブは介在せず、単に病気で死んだという見方である。

私はインフォーマントの K に、ふたりになったときに「G を殺したのは T しかないじゃないか？何でわざわざ金を払って呪医に確認するんだ？」と聞いた。かまをかけて、K の反応が見てみたかったのだ。断定口調の私に、K は論すかのように「呪医に確認するまでは我々には確かなことはわからないんだ」と説明した。

後日、エリエーブ持ちと疑われている T とぼったり出くわすことがあった。昼間だったが、T はすでに酔っぱらっていた。T は私に向かって、最近のゾウの密猟の規制や、昔のゾウ狩りの様子についてとりとめなく話を始めた。ところが、それが耳に入っていないのである。私は何だかよくわからない感情に囚われ始めている自分に戸惑っていた。終いには、「お前は調査者なんだからもっとしっかり話を聞いて質問しないと」などと T

自身に説教される始末だった。

今にして思えば、あの時の感情は嫌悪感に近いものであった。それは、私が以前からTについての良くない噂を聞かされていたからかもしれない。私の下宿先の奥さんLは、Tの長女なのだが、この父娘は不仲であった。「Tは一度だって捕った魚を私たち子どもに分けてくれたことがない。もっとも、仮に分けてくれるとしても私は食べないけど」などと、Tへの敵意をむき出しにすることがあった。また、不妊で悩む彼女に、呪医が「Tがエリエーブの力で邪魔をしている」と教えたらしい。彼女は呪医に頼んでTを殺してもらうことさえ考えたという。

私とTの間には何の怨恨もないし、まして私はエリエーブの存在を信じてさえいないはずだった。Tを嫌悪する理由はどこにも無い。LのTに対する感情が、部分的にはあるが私に伝染したということだろうか。

Gの死は、身体の不調を長期間放置し、病院にも行かなかったことが原因と私は考えていた。しかし、Tがカントンの後継者としての地位を確実にするためにGを殺したという説明がいかにもありそうだというのも実感としてあった。しかし、そうすると私自身がエリエーブの存在にコミットすることになる。私の中でこの2つの思考が齟齬をきたしている。

これは、私の中にある科学的・合理的思考とそうではない思考の間に生じた齟齬であると言い換えることができるだろう。私にとって、この2つの思考はそれぞれの場面では同様に説得的である。ところが、それを同時

にみつめるような機会にはまるでそのはざまに立たされたかのような当惑を抱かせる。それは、フィールドにおける私の半端な立場と相似しているかのようだ。私は何とかしてバクエレのものの見方や考え方を知ろうとするが、到底十分ではない。しかし同時に、バクエレ流の思考に影響されることによって、平均的な日本人からは逸脱してきているという実感もある。フィールドから日本に帰って来ると、いつも頭が切り替わらずに悩まされる。フィールドにおける私はバクエレの人々と日本人のはざまに立たされた、中途半端な存在なのである。

ところで、思考内における齟齬については、バクエレの人々にとってもそうなのかもしれない。たとえば、インフォーマントのKはGの死について、家族がGの病気を放置したためという説を取った。つまり、Gの死にエリエーブは関係しないという立場である。ところがGの遺族たちから話を聞くにつれ、徐々にTがエリエーブでGを殺したという説に傾き、その後の私や他の人物との会話ではその時々で両方の説の間を揺れ動いていた。この時、Kは科学的・合理的思考とエリエーブ的な思考のはざまに立たされ、その両者の齟齬に直面していたのかもしれない。彼にとっても、TがGをエリエーブで殺したというのは説得力があったものの、自明ではなかったのだろう。これは、エリエーブ持ちのみが他人のエリエーブの活動を知ることができる、というバクエレの考え方からくるのだと思われる。つまり、エリエーブ持ちではないKにとって、Gがエリエーブで

殺されたという確証を得るには、エリエーブ持ちである呪医の見解を待つより他ない。同様に、彼は医者ではないので G が単純な病で亡くなったのか確信をもって判定することができない。私の断定的な物言いにに対して彼が留保の姿勢をみせたのは、こういった背景があったためではないだろうか。

ところが、こういったはざまを彼らは易々と乗り越えているようにみえるときもある。たとえば、病院で手術をしても失敗することがあるのは、エリエーブ持ちではない医者が手術を担当したためといわれることがある。エリエーブ持ちでない医者は、患者の体内にあるエリエーブに気がつかず、手術中にメスで斬りつけ消毒してしまう。すると、患者は死んでしまう。反対に、エリエーブ持ちの医者は、患者の体内にエリエーブが存在すれば、それを避けて手術をすすめることができる。また、医者がエリエーブを持っていれば、患者の症状が、単なる病気によるのか、それともエリエーブが関係しているのかが、呪医のように分かったインフォーマントの K は言う。もしエリエーブが関係していればそ

れは呪医のところで治療しなさいとすすめることもあるということだった。

このように、病院の医者という科学的・合理的思考の担い手ともいいうる人々の振る舞いを、彼らは実にエリエーブ的な思考で眺めている可能性があるのだ。この時の彼らは、2つの思考のはざまで板挟みになっているようにはみえない。実はこれらの思考の間には、広大な重なり合う領域が存在しているのかもしれない。これは、エリエーブの獲得のされ方を説明する際に、「細菌のように感染する」という言い回しが好んで使用されることにも現れている。この場合、疫学的な比喻によってエリエーブが語られているのだ。だとすれば、重なり合っているというよりは、むしろ2つの思考は互いを翻訳しあうことによって新しい領域を形成しているようにもみえる。

このような領域を考える際に、科学的・合理的思考とエリエーブ的な思考という二分法自体を疑う必要がある。私が「はざま」だと思っていた場所は、実は広大な平原の中の小さな窪みでしかないかもしれないのだから。